

学童保育での気づき

社会福祉学部社会福祉学科 2年 藤田 貴大
活動先：NPO 法人 学童保育ざりがにクラブ
クラス：原田 正樹 先生

1. 自分の成長と気づき

子どもと触れ合うことが好きな私にとって、学童保育に行けることは希望通りのフィールドワークとなった。しかし、ここ数ヶ月の間、障害を持っている子どもと交流する機会が多かったので、健常の子どもと触れ合うことは久しぶりのことであった。現代の子どもはどんなことが好きなのか、何に興味があるのか、子どもと同じ視点で一緒に遊んであげることができるのか、いろんな不安や心配事が活動先に行く前から頭によぎった。しかし、実際に子どもと対面すると、自分はいつの間にか笑顔に変わっていた。子どもはいきなり来たお兄さんを暖かく迎え入れてくれて、話し掛けてくれたのだ。「お兄さんお名前教えて」と、気付いたら自分の周りに沢山の子どもが集まっていた。自分がどうやって子どもと接しようと考えている間にも、こうしていろんな事を私たちお兄さんに聞いてくる子どもの積極的な姿勢に驚いた。人は大人へと成長するに連れて、友人や信頼出来る人とはコミュニケーションを取るが、他人や無関係な人と話すことになると慎重になることや、相手に気を遣うことを覚えてしまう。しかし、この学童保育にいる子どもは、私たちのことが純粹に気になって話し掛けてくれた。このような純粹な姿勢を、忘れかけていた私に子ども達が教えてくれた。子ども達の積極性に私は後押しされて、いろんな子どもとコミュニケーションが出来るようになった。

室内遊びではほとんどの子がゲームをしていて、始めは外遊びが好きな子は少ないのかなという印象があった。しかし、夏休みだったため、プールに行った時に印象が大きく変わった。「お兄さんあっち行こう、浮き輪引いて」とプールの中を走り回り、小さい子は「おんぶして」と頼まれることもあり、パワフルな子どもに圧倒されて食い付くのが一杯な6日間だった。そこで子どもを見ていて気付いたことは、笑顔を絶やさないと決めたことだった。どこで何をしても、常に笑顔でいてくれた子どもに私自身何度も励まされた。疲れていても、子どもと一緒に常に全力で遊ぶことを大切にしたい。これを大切にしたい理由は、全力で大人にぶつかってきている子どもに対して、適当にあしらうことはしたくなかったからである。自分が全力で子どもと関われば、子どもが全力で自分に関わってくれる関係を作り、一人一人の個性に合わせて6日間を過ごした。

6日間という短い期間であったが、いろんな子どもと触れ合うことにより、いろんな考えを持っている子ども達から良い刺激を貰えた。この学童保育で交流できたことは私の中の思い出の一つであると同時に、また違う学童保育に行く時に、子どもと上手なコミュニケーションの仕方の勉強にもなった。人と話すときに、「笑顔」を忘れずにこれから頑張っていこうという気持ちにさせてくれた6日間の学童保育であった。

2. この活動を通して見えた地域活動や社会課題

ざりがにクラブに6日間お世話になって気付いたことは、障害を持っている子が数名い

たが、ほかの子と交流している時がお昼ご飯やおやつの時しか機会がなく、自由な時間は職員か一人で遊ぶ場面が多々あった様子であった。ざりがにクラブに来ている子ども達は積極的な子が多く、自分から行動出来る子が多いと感じた。子どもの積極的な部分を使って、折り紙で羽鶴をみんなで作るなどの共同作業を行い、交流する機会を与えることが出来たら良いと思った。より障害を身近に感じ、障害の状態を知ってもらう機会を一度子ども達の前で設けることを行なったら、もっとざりがにクラブの良さが増すのではないかと思った。これだけ子どもが仲良しな学童保育は、他を探しても見つからないと思う。この学童保育が続く思いも込めて、健常と障害という枠組みを超えた学童保育の場が完成していれば理想的な場になっていると思う。

この暖かい場所がいつでも提供できる学童保育を守り続けている理事長さんの思いは、いろいろな子育てに悩んでいる保護者が知る機会はどのように設けられているか、私は活動通して疑問に思った。南加木屋の場所は、自然豊かな場所でのんびりとした町という印象があるが、是非他の町でもこのような民間で頑張っている学童保育があることを知って欲しいと思った。行政が行なっている学童と民間が行なっている学童の違いをそれぞれの現場で感じ、一から学童保育を見直して欲しいと思った。

3. 最後に

ざりがにクラブの理事長さん、指導員のみなさん6日間の活動はとてもお世話になりました。本当にありがとうございました。子ども達の元気な姿を沢山見ることができて、楽しい6日間を過ごすことができました。私は子どもが好きなので、この6日間の活動で終わりではなく、この繋がりを大切に、これからも子ども達の成長する姿を見ていきたいと思っています。しかし、子どもだけではなく、自分がいろんな視点から考える必要のある障害や高齢者の分野にも踏み込み、福祉という考えの幅をこれからも広げていきたいと考えています。